回想録

　昨年、終戦７０周年を迎えました。終戦間際の東京で歯科女子学生として勉学に励んでいた「木村ミツ」先生に貴重な体験談をお聞きしたので、紹介いたいします。

　昭和１７年東洋女子歯科専門学校入学のため兄と上京、隅田堤の見事な桜並木、新築の富士寮入寮。一階は主に新入生、二階は上級生室長（級長）、私は何故か二階への入室となったが、私の部屋の室長（副級長）と一階の室長が親しかったため同室の？青森県出身の西田さん山形県の太田さんとは一生の友達、同じ釜の飯を食べた仲。上京時は何事も珍しく、上野美術館で油絵を見ては感激、見たることない手法に驚く。誰かと喧嘩し淋しくなると上野動物園猿山を見て心を和やかした。給料を貰ったら猿を飼うと思った。

　４月頃かと思う昼休み部屋で３人でおしゃべりしていたら、飛行機の音がするので窓から身を乗り出して見る。見たこともない飛行機だネと云った途端に空襲警報、転がるように部屋を飛び出して校舎の地下へ、洗濯流し台に潜り「神様助けて、父さん母さん助けて」。

　一生目に残る学徒出陣壮行会、朝暗い中に大粒の雨の中神宮外苑へ、男子学生の力強い行軍。どんな事があっても女子学生は銃後を守る、国を守ると決意する。戦後青春時代を無にしたと云う方もいるが、私達は良き青春だったと思う、目標があったから。

　三月休みの帰省中に三月１０日の大空襲で校舎、寮が焼失。地元で待機との連絡を受け北炭夕張炭礦院歯科にて研修、富田習朔先生、練也先生のご指導を頂戴した。医長室と技工室は一緒で、当時の義歯はゴム床、技工士の平野先生、ゴム床に小さく切った生ゴムを詰める手際の美しい事、ただ見ているうちに眠くなる。富田先生は当時からレジン床の研究をされていた様で、先生の診察は会社の部長級や課長級を対象とした特診のみ。

　昼休みには大きな火鉢にゴム床義歯の釜をのせるが、ネジの締めがゆるく爆発して部屋中煙になる事もあった。婦長さんも同じ年なのに全く落ち着き立派な人達でした。

５月に再び上京、赤坂の高級料亭が宿舎となった。近くには皇族方のお屋敷があり常に営兵が立っていた。勉学というよりライオン工場などの軍事工場に報使の日々。山形から太田さんも到着、リックにお餅などの食料がいっぱい。夜中に空襲警報、焼夷弾が雨の様、火の粉が吹雪の様に舞う。一緒に出た友人の足首に焼夷弾が当たる。幸い近い所に救護所があったのでお願いする。丁度軍のトラックが来て学生さん達乗りなさいと云ってくれて助かる。その代り荷台に火がついたら火打棒で払ってくれとの事、一生懸命棒を振る。空襲も終わりもう大丈夫でしょうと皇居のお堀ばたで降ろしてくれる。一面の焼け野原で何処へでも行ける。土手の草原でひっくり返り餅を食べて本郷の本部へ戻るが歩けど歩けど到着せず。やっとたどり着いたら本部は上野、院長もそちらにおられるとの事、兄が心配して汽車の切符とおにぎりを持って待っていてくれ北海道に帰る様にとの事、本部の許可がいるのでまた歩く、暗くなっても辺りの火で明るい。やっと到着したが、牛込寮で亡くなられた３人を荼毘している時だった。お参りして上野駅へ、帰夕後は毎日炭礦病院へ、富田先生は日本歯科出身で女子歯科医専の入交院長との交流があり連絡を取って戴きそのまま研修する事となった。富田先生から学校の方へ報告書をお送り下さった様。

　終戦の玉音放送は病院の広間で聞きました。その後続々と就職を求めてペンシルバニア大学、京城大学等色々な学校の出身の先生が来られた。当時労働組合の力が強く各礦山の分院にも歯科を設置、本院で10日程就業されてから各礦山へ就任されて行かれる。各先生より色々のお話を聞いたりご指導を戴く。

２０年上京、御茶ノ水の入交院長宅で口頭試問で文部省試験を受ける後、卒業証書、文部省より歯科医師免許証お送り頂く。前期の文部省試験は空襲のためなし。なんとなくどさくさに紛れた歯科医師誕生。

　炭礦病院は患者数も多く私も早い時期から抜歯等外科的な症例を手がける事が多く、また容態の急変時など外科や内科の先生が来て下さり色々指導して頂けたので、何事もなく歯科医師を務めてこられたと思います。

　当時復員して来た木村先生（主人となる）が若いのに良くこれだけの事が出来るねと褒めてくれました。後に結納の入った日から仕事を止めるようにとの事。１０年後に主人の皮膚炎発症で治療室へ、隣の応接間に主人が横になり患者さんのカルテを持って指示して貰う。何せ私の時代の印象材はモデリングや石膏印象、それが寒天印象はモデルンになり、エンジンは豆腐を切るような軽さ、戸惑うばかりでした。

　主人が癌を発病後に長男重人が東京を引き上げ応援に、一時主人が退院、主人、重人、三男の悟、私と四人治療室に立った時は楽しかった。写真を撮っておけば良かったと思います。

　今は中の良かった東洋時代の友達も次から次と減っていきとうとう二人だけ。いたし方のないことですね。